



平成 29 年度 四天王寺中学校 入学試験問題

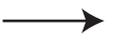
「講評と対策」印刷一部誤りのお詫びと訂正について

平成 29 年度 四天王寺中学校 入学試験問題「講評と対策」の 6 ページに掲載いたしました国語問題文に誤りがありました。

受験生の皆さま並びに関係者の皆さまにご迷惑をおかけしましたことを謹んでお詫びし、訂正いたします。

《誤》

でも、今はなんてことはない。こんなに、そばにいないのに、ちがう。こんなに、そばにいないから。
「お父さん、泣いているの？」
「泣いているわけないだろう。」
「でもさっきから鼻すすってるよ。」
「お父さん花粉症なんだよ！」
「ちがう、とふきだしたのはお母さんだった。つられてわたしもよっつ笑うと、お父さんはもも言いながらゆっくりと腕を下ろした。
静かな道の上、むきゅつとひとつになっていたかたまりが解けていく。
お父さんは涙目で、ちよつと入ツの悪そうな顔。お母さんは必死で笑いをこらえ顔をしている。そしてふたりともとても優しい表情になって、いっしょにわたしを見た。
「帰ろう、星」
片手ずつのばされたふたつの手のひら。小さいこゑを思い出す。出かけるときはいいだった。うしろ、わたしは大きなたりにさままれて歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって、リタガいもしなかったあのとき。大好きなふたりの間、そが自分だけにゆめされた、特別な場所、そが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はちつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで、自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても、変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけ。特別なんだということだ。
「うん、帰ろう。」
夜でよかった。高校生にもなつて両親と手をつないで歩くだなんて、さすがに人に見られたらはずかしくて、それでも手ははなさなかった。
お父さんは、もうそんなに見上げなくなつた。お母さんは、いつのまにか背をおいして、世界で一番しあわせな顔で歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって、リタガいもなかったあのとき。大好きなふたりの間、そが自分だけにゆめされた、特別な場所、そが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はちつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで、自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても、変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけ。特別なんだということだ。
「うん、帰ろう。」
夜でよかった。高校生にもなつて両親と手をつないで歩くだなんて、さすがに人に見られたらはずかしくて、それでも手ははなさなかった。
お父さんは、もうそんなに見上げなくなつた。お母さんは、いつのまにか背をおいして、世界で一番しあわせな顔で歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって、リタガいもなかったあのとき。大好きなふたりの間、そが自分だけにゆめされた、特別な場所、そが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はちつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで、自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても、変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけ。特別なんだということだ。
「うん、帰ろう。」



《正》

でも、今はなんてことはない。こんなに、そばにいないのに、ちがう。こんなに、そばにいないから。
「お父さん、泣いているの？」
「泣いているわけないだろう。」
「でもさっきから鼻すすってるよ。」
「お父さん花粉症なんだよ！」
「ちがう、とふきだしたのはお母さんだった。つられてわたしもよっつ笑うと、お父さんはもも言いながらゆっくりと腕を下ろした。
静かな道の上、むきゅつとひとつになっていたかたまりが解けていく。
お父さんは涙目で、ちよつと入ツの悪そうな顔。お母さんは必死で笑いをこらえ顔をしている。そしてふたりともとても優しい表情になって、いっしょにわたしを見た。
「帰ろう、星」
片手ずつのばされたふたつの手のひら。小さいこゑを思い出す。出かけるときはいいだった。うしろ、わたしは大きなたりにさままれて歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって、リタガいもしなかったあのとき。大好きなふたりの間、そが自分だけにゆめされた、特別な場所、そが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はちつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで、自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても、変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけ。特別なんだということだ。
「うん、帰ろう。」
夜でよかった。高校生にもなつて両親と手をつないで歩くだなんて、さすがに人に見られたらはずかしくて、それでも手ははなさなかった。
お父さんは、もうそんなに見上げなくなつた。お母さんは、いつのまにか背をおいして、世界で一番しあわせな顔で歩いていた。世界で一番しあわせなのは自分だって、リタガいもなかったあのとき。大好きなふたりの間、そが自分だけにゆめされた、特別な場所、そが世界の中心なんだと、心の底から信じていた。
そうじゃないと今は知っている。世界はちつと広くて、きたなくて、不確かなものばかりで、自分はいつだってはしつこの方にまぎれている。
それでも、そんな今になっても、変わらないのは、やっぱり、このふたりの真ん中に立つのはわたしだけ。特別なんだということだ。
「うん、帰ろう。」

なお、正しい内容は、本校ホームページ「重要なお知らせ」より印刷ができます。 <http://www.shitennoji.ac.jp>